



TITLE:

学生の声

AUTHOR(S):

CITATION:

学生の声. Cue 2006, 15: 60-60

ISSUE DATE:

2006-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/57886>

RIGHT:

学生の声

「追求したいものが見つかるまで」

工学研究科 電子工学専攻 鈴木研究室 博士課程2回生 山田 義春

進学することを決意した人なら全員が、「これをより深く追求したい」といえるものを持っていると思います。私の場合は、多少の回り道をしながらそれが見つかりました。

「電力であれば使われなくなるなんてないだろうし、安定しているだろう。」高校生の頃の私は、その程度の考えで電気系を志望しました。しかし、一口に電気系といってもエネルギー、エレクトロニクス、情報通信など対象となる分野は広範囲で、1～2回生ではそれぞれの基礎的な科目を学ぶことになっていました。実際に学び始めてみると、電力系の講義は私にとってはあまり興味がわかず、このようなシステムでよかったと思います。当時は、「IT革命」などといった言葉が流行っており、私はそれにつられてプログラミングなどに力を入れていました。プログラミングの科目では夏休みにやや難しい課題がでていたのですが、私は自力でなんとかその課題を解き、「まあこんなものだろう」と自己満足していました。ところが、親しい友人らのものをみせてもらうと、私のよりもかなり速く、余裕があるのかグラフィックまで凝っていました。「この分野では勝負にならない」と痛感する出来事でした。ちょうどそのころ、電子物性に関する科目が始まり、自然に興味がわいてきました。量子力学に初めてふれて、その不思議な理論に魅了され、3回生では量子力学、統計力学ばかり熱心に勉強していました。(現在実験する際に3回生配当のマイクロ波、電波工学がややおろそかだったのを少し後悔していますが)

4回生になると、基礎物性を研究したくて鈴木研究室を選びました。私は高温超伝導を研究していますが、最先端の実験研究をして、世界で誰もよく分からないことを考えることは非常に刺激的で、すぐに「もっと追求していきたい」と思うようになり進学を決意しました。現在、実験がうまくいかずつらいこともあります。追求したいものを見つけることのできた私は、研究のさらなる発展を目指して頑張っていきたいと思います。

「国際会議の経験から」

情報学研究科 通信情報システム専攻 吉田研究室 博士後期課程2回生 山本 高至

日本人が英語を苦手とする理由としてこれまで様々な説が出されている。このような説の真偽は別として、聞いてしまうと英語を勉強する気がなくなってくるように思う。だからといってこのような説を出すことを一概に悪いと言いたいわけではないが、日本人、特に学会に出て行くような日本人たちが最終的に敬意を勝ち得るという目的には、必ずしも適していないのではないかと考える。

幸運にも、私は国際会議での発表のために、アジア、アメリカ、そしてヨーロッパに何度か行かせて頂いた。そこで気づいたことは、これまで聞いた覚えのあるお説教、すなわち「英語は世界中で通じる(から勉強しよう)」は必ずしも当たっていないということだ。英語を母国語としない国では英語が通じないことの方がよほど多い。四つ星以上のホテルや空港を除けば、切符売り場でも、タクシーでも、レストランでも。

そしてもう一つ気づいたこと、これが重要なのだが、市中で英語が使えない国の人でも、会議の参加者はかなり高い確率で議論が自由に出来る英語を身につけているということだ。これは、日本以外の非英語圏の人々も何とかして英語を使えるようにしている、ということだろう。たとえ日本人より英語が上手くなる条件が多いとしても。そういう人たちの前で下手な英語を使えば、「こいつは英語が下手だな」ではなく「こいつは努力不足」という印象を与えるのではないか。このように感じ、遅滞しながら英語に取り組んでいる。

余談だが、初めての国際会議で教授の後ろについてこそこそ歩いていると、綺麗な女性に“What a handsome boy!”などと言ってもらったのに、びっくりして何も言い返してあげられなかった。このままでは面目ないため、別の国際会議で“What a beautiful lady!”と可愛い女性に声をかけたら仲良くなった。このような経験から、手遅れかもしれないが女性を褒めることにも取り組んでいる。